

---

# とわのこぬこ

uyr yama

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とわのこぬこ

### 【著者名】

2029Y

### 【作者名】

uyr yama

### 【あらすじ】

ぬこは今日も、にゃーにゃー、にゃーにゃー。海鳴の街の空は青く。海も、青い。世界は広く、暖かく。やさしいご主人と、その妹たち。そんな優しい環境で、ぬこは前世のしがらみに気付かない。だって、ぬこはぬこだもんね？

## むじてんせー

身体中が痛い。

呼吸をするのも辛いほど。

いいや、それこそ、生きる事が辛くなるくらいに、身体が痛い。

痛みのせいなのか？

視界がぼやけて何も見えない。

耳鳴りが酷く、聞こえてくる音はザーザーといった異音だけ。

だから周りがどうなっているのかもワカラナイ。

ああ、死ぬのだな……

あともうちょっとだったのにな……

苦節20ウン年。年齢=彼女イナイ歴から何とか脱し、よひよへ、  
ようやく童貞を卒業できそうだったのに……っ！

クソッ、クソッ、クソッー！

腹立たしさと無念さで、気が狂ってしまってしつだ。  
だけども、まあ、仕方ないか……

傷だらけで血塗れな青年は、そこで生きるのを諦めた。

彼は諦めが速いのだ。

泣いてすがる恋人と、青年に突き飛ばされて呆然としている少女と、その少女の母親が申し訳無むをもつて、ありがとうございました、ありがとうございました。何度も頭を下げていた。

でも、耳鳴りが酷い青年の耳には届かない。

「クソ、マジで痛えよ……」

吐き捨てられた悪態は、恋人の嘆きの慟哭のせいで誰の耳にも届かない。

それでも、今わの際の奇跡なのか、青年の視界がクリアに広がった。耳鳴りがサアーッとひいて、全ての声が聞こえる様になった。

青い、青い、どこまでも青い空だ。

ざわめきと、嘆きの慟哭が、それら全てを台無しにしてたけど。

視線を巡らせる。

涙と鼻水まみれの恋人と、真っ青にしているトラックの運転手。

そして、黒い子猫。

「生まれ変わるなり、ぬこがいい

「バカっ！ なに……なに言つてんのよおつー！ つて、ぬこつて言い方止めなさいってあれだけ言つたでしょー？ オタク臭いのは

止めるつてアレだけ……」

泣きながらそう言つ恋人に、青年は最期の力で笑つてみせた。

「お、まえの、そういうトコが、大嫌いなんだ。だから、もう、別  
れようぜ。そして、わざと、俺のことな……か、わす……ちま、  
え……」

死に際に格好つけるのは、漢のロマン。  
満足だ。これ以上ないくらいに満足だ。

童貞捨てられてたら、言つ事なかつたんだけな～。

そこで、青年の命の鼓動が止まつた。

「ばかあーつー！」

だから恋人の嘆きの絶叫は、青年の耳には届かなかつた。

次に気がついたとき、やっぱり田は見えなかつた。

それでも本能なのかな？

暖かい何かにすりよつて、必死にかぶりついた。  
周りにも、自分と同じ何かが一杯いる。

なー なー みーー みーー

ああ、この声は、ぬこ だ！

いや、もしかして、自分もぬこなのではなかろうか？

そういや、死ぬ直前に思ったなー。

生まれ変わるなら、ぬこがいって。

そう考へながら、ぬこは兄弟だか姉妹に負けないよつ、必死にお母さんネコのおっぱいをちゅーちゅーする。

人間じゃなくなつたのはショックだけども、これからぬこ生、必死に生きる為にはおっぱいが必要なのだ！

元青年……現ぬこはやつぱり諦めが速かつた。  
人間としてのプライドをあつさつ捨てて、ぬこになったのだから。

ぬこは今田からぬこになる。

ネコではなくて、ぬこ。

彼女が言つてたではないか。

ネコをぬこと呼ぶのはヤメ口つて。

オタクみたいだからヤメ口つて。

だつたらぬこはぬこにならうと思つ。

世の紳士たちの為にも、ネコではなくぬこ。

そつすれば、もう、オタクだとバカにされないのだから……

ぬこが自分をぬこだと言つても、しょせんはネコなんだと分かつて  
いない。

そんなぬこは、お腹いっぱいオッパイを吸つて、ふあ～と大きく欠  
伸をしたあと、兄弟姉妹に囲まれながら、暖かい眠りにつくのだ。

わあ、アナタの望みはかないました。

どうか、今度は幸せに……

ぬこは田の前の光景に、目をキラキラさせた。

ぬことして産まれ落ちて以来、初めて田にした人の文明。  
小高い丘の上から見たその光景は、前世の人間だった頃の郷愁を、  
否が応にも思い越されるからです。

「みやー」「みー」「みやー」「みやん」「なーなー」

さあ、行くのだ！

つと、ぬこのあよつだい達はぬこを急かしました。

ぬこを置いて、いつのまにやら立派な大人の猫に成長したぬこのき  
ょうだい。

でもぬこは、いつまで経っても「ぬこのまんま。

きょうだい達は、みんなみんな立派な成猫になつたのに。  
そうして一匹、また一匹とママネコさんの下から巣立っていくきょ  
うだいたち。

本当だつたらぬこもあよつだいたちと一緒に巣立つはずだったのに、

ママネコも、あみつだいネコも、ひらちやいぬが心配で仕方ありません。

だからぬこママネコとずっと一緒に。

ぬこが産まれた春の季節から、とっても暑い夏に変わり、色鮮やかな秋に変わり、白い死神が吹き荒ぶ冬になり……

そうして再び春になつたある日、ママネコの下から巣立つたきょうだい達が、ぬこことつての優しい世界を見つけ出し、こうして此処へと連れて來たのです。

この世で最も猫にとって安全だろう、海鳴の町にて、ぬこにとっての安息の地となると信じて。

ぬこは子供の両手に納まる程度の身体をピョント跳ねさせ、きょうだいと、そして大好きなママネコの方をジッと見ます。

「ここやーう（ぬこ）、アナタの巣立つ日が来ました）」

「なーう？（なに言つてんの？）」

……前世が人間だったせいでしょうか？

ぬこは猫語が分かりませんでした。

それでも雰囲気的に何を言つてるのか分かってるのでしょうか。

小さな小さな両のお皿々に涙がいっぱい。

立派な成猫になつたきょうだいたひこ、ふわふわモコモコの類ですりすりと頬ずり。

最後にママネコの鼻先をペロリと舐め……坂を一気に駆け下ります。

精神が完全に「ぬ」になつた、前世が人間で、今せ「ぬ」のぬ。あよつだことママネコが心配やつて見守る中、コトント足を引つ掛け、

「みやづつーー?」

モモのよつてりんじらうと、人間の町へと転がり落ちてこあましだ。

「みやづみやづみやーー?」

思わずぬこに駆け寄つやつになつたあよつだことママネコたが。

でも、

「みやづみやづみやーー?」

ぬこの結構余裕やつな鳴き声に、足を止め、後ろを振り向きます。

「みやづみやづみやーー?」

一斉に別れの一聲を上げると、「みーつーー」ぬこの鳴き声を背に  
猫の世界へと帰つていきました。

わよつなり、ぬこ

猫たちの、別れの言葉……

猫の……野生の世界は厳しい。

もう、会つ事はないだらう、きょうだいとママネ!»。

ぬこは泣きながら転がり、そして……

ひやつぼー。人間じはんがぬこを待つてるぜー！

あつさりと氣分を変えました。

……ぬこは、諦めが速く、氣分の入れ替えも速いのです。

そうして、ぬこになつて初めてのアスファルトに、ぬこになつて初めての海の香り。

ぬこになつて初めての人間に、ぬこになつて初めてのひとつまつち

……

とわの「ぬこ」の冒険が、はじめて始まるのでした。

なーう なーう にゃん にゃん にゃん みゅー・

ぬこの鳴き声が、海鳴りの町に響きます。

ぬこはそろそろ人間の食べ物が恋しいです。

ネズミやスズメがご馳走な生活もいい加減に疲れたし。

ああ、魅惑のジャンクフード……

待つてろー！ コンビニー！

待つてろー！ カップラーメンー！

ぬこは、自分がぬこだって、覚えてるんでしょうか？  
ぬこが行つても、コンビニでカップラーメンは買えませんのにね。



みー

むかーしむかし、海鳴の町にてぬいじがおつました。

そのじぬい、

リンカー・コアを持つてたり、気を操って最強ぬこだつたり、  
はたまたジュエルシードの力でミコータント化したり、  
いやいや、それどころか死にかけて使い魔化したり、

なーんて、いっさいない、普通だけどもちょっと変わったじぬい。

ぬいじは海鳴の町に入るなり誓います。

ぬいじは、町に生きる立派な野良ぬいになるー！

ママネー！やめようだいに負けない、立派な野良ぬいにならぬい！

とこととと……

立派な野良ぬいを田舎すぬいが、海鳴の町を短い足で疾走します。

田舎ではコンビニ。人間じゃん！

……そり、こんなちよつと変わった とわのこぬこのお話が、海鳴の町で始まります。

通りすがりの人々が、ほんわかした表情で見ている黒い毛玉。  
ちょこんとコンビニの前に座る様が、とっても愛らしい。

「みやづ……」

でも、悲しげに鳴いています。

ぬこの田の前の建物からは、とても好い匂いがしてくるからです。お腹があやつって鳴るのに、ぬこはその建物の中に入ることが出来ません。

カリカリ、カリカリ……

「にゅー、にゅー」

悲しげに泣きながら、入り口の扉に爪を立てぬこ。  
おでん、にくまん、お弁当……  
数々の魅惑の商品がそこにある。

でもぬこはぬこだ。

人ではないから入れない。

いいえ、入ることが出来たとしても、中の商品を買ひことは出来ないのです。

それに、建物の中の人間が、煩わしげにぬこを睨みます。

ぬこととして生を受け、初めて感じる人間の負の感情。

ビクンッ！ 背中と言わず、全身が総毛立つ。

ぬこは後ずさるよつにして数歩後ろに下がると、次の瞬間ににはピコ  
ーっと一田散に逃げ出しました。

「みゅあ、みゅーみゅーみゅー（怖えー、人間怖えー）」

ぬこは忘れていたのです。  
自分がただのぬこだつて。  
力もお金も何もない。ただのぬこだつて。

ぬこは寂しげに周りを見ます。

視界は低く、地面に近い。

今まで森の中で、周囲には猫だけだったから気にしませんでしたが、やっぱり人とぬこは違いました。ぬこであると決めてはいましたが、まだまだ心の奥底では人間だと思っていたのです。

でも、ぬこは強い子です。

たとえ力がない とわの「ぬこ」でも、心の強さだけは誰にも負けない。

だから、「元やん、元やつ（元、こつか）」「いやつぱりあいつ」と氣分を変えました。

果たして、「元やんの強さなんじょいかね……？」

それはともかく、ぬこはお尻ぶつぶつ、しゃばりフリフリしながら歩き出します。

ぬこはお腹が空こてるのです。

小さな身体でも、こつぱに食べるぬこ。

死の冬を乗り越えただけあって、一日一日程度食事を抜いても死にはしませんが、このままでは力が出なくなつて狩りが出来なくつてしまつのです。

……今はもう、ぬこを守り、ぬこのためにご飯をとってくれるママ  
ネ「はいません。

ぬこは全部自分の力でご飯をゲットしないといけないのです。

と、その時でした。

ぬこの身体が大きな影に覆われたのは！  
マズイ！　ぬこは大慌てで逃げ出そうとします！

ぬこは食物連鎖的に結構下の方に陣取つてますから、自分よりも身体が大きい獣や、空を飛ぶ猛禽類とかカラスなんかに襲われたらひとたまりもありません。

だからダッシュしようと足に力を入れた瞬間、

「腹が空いているのか？」

久々に人間の言葉を聞きました。  
ぬこは恐る恐る後ろを振り返ります。

ズボンは黒、服も黒、髪も黒ならば瞳の色も黒。

全身黒ずくめの高校生位の少年が、むつとした顔でぬこを見下ろしています。

ぬこは猫の言葉は分からなかつたけど、やつぱり人間の言葉は分かるんだなと思いながら、「なー」と一声鳴きました。すると少年はコンビニの袋の中から缶詰を取り出し、パカッと開けて、ぬこの前に差し出します。

缶詰には、猫まつしげりーと書いてあるのがぬこには読めました。

「いや、ひへ（食べていいの？）」

ぬこは不思議そつに鳴きます。

「ああ、いいぞ」

「みやう~（ほんと？）」

「ああ、ほんとのほんとだ」

「なーう、なーうつー！」

元人間としてのプライドがまつたくないぬこは、喜んで缶詰に顔をつつこみ、がふがふ、がふがふ、と一心不乱に食ります。

初めて食べる猫缶は、思っていたよりもずっと美味しく感じられました。

それがぬこだからなのか、元々美味しいものだつたからなのかは、ぬこには分かりません。

「乳離れは済んでたか……ミルクと猫缶、どちらがイイのか迷つたが、よかつた」

少年のむつりとしたしかめつ面が、ふんわり柔らかく笑みました。

げふつ

ぬこは全部食べ終わると、小さくゲップします。

そつして前足で顔を「じこじこ」したあと、少年に「みつこー」元気良くお礼しました。

そして『返づく』のです。

「『やうづる』（どうしてぬこがお腹が空こてるのを知つてたの？）

すむと少年は言こます。

「『ハハハ』の前で鳴いてただろ？」

「なーーいへ。（それだけで？）」

「ああ」

少年は言葉少なくそつまつと、ぬこが食べた猫缶をコンビニ袋に戻し、踵を返しました。

「じゃ、またな」

ぬこに背中を向け、手を小さくひらひらと振ります。  
それはやぶやけの挨拶。

でも、ぬこは……

ぬこは、この黒いのをじしゃじんに決めた。

無愛想でちょっと怖い田つきだけど、きっと優しい人だとぬこセンサーが告げるから。

もう立派な野良ぬこになるなんて誓い、すっかり忘れてます。  
ぬこはぴょいぴょいと、短い足で必死に少年の後を追いかける。  
そんなぬこに困った少年は、ぬこを抱き上げ視線を合わせると、

「家は飲食店なんだ。だからお前は飼えん」

やつぱりせつと告げるのです。

でも、ぬこせそのまま少年の身体によじ登り肩に到ると、しつかとしがみつきました。

そうして少年の頬に何度も頬ずりして、

「じゅじん、ぬこをもふる権利をあげよー。」

なんだつたら、肉球ふにる権利でもいいだー！

少年は大きく、「はあ～」と溜息を吐くと、疲れたよつて血色へと向います。

「一応せゆさんと父さん」聞いてみるが……」

ダメだといわれたら、その時は諦めろよ。?

言外にやつ言つ少年に、ぬこは分かつたと返事をします。

「それでも、もしも許可がでたら、その時は妹のなのはと仲良くなってくれ。俺たちは、あの子に向もしてやれなかつたから……」

「いやー、やべー！」

「俺は高町恭也、お前に名前あるのか？」

「いやー、やべー。」

「 むいか、 むいか…… 変なやだな

「 なーうつー

…… むいかは『 気づこころの』 のでしょうか？

少年と意志の疎通が出来てゐる」と。まあ、『 気づこても、気づかなくても、むいかせむ』、なにですかね。

原作どちらでも、恭也は道端で出合った猫に餌をあげるために、コンビニに行ったりしています。

ちなみにその猫、後に自分の子供を見せるH派ソードがありなんかして、とってもホンワカです。

## 幕間 ひるいん？ の憂鬱

私立聖祥大学付属小学校は一年生の教室で、一人の金髪美少女が窓際の席に座っています。

「はあ……憂鬱ね……」

重い空気を肺から出し、言葉通りに憂鬱そう。頬杖をつきながら、とても小学生とは思えない哀愁漂う瞳で、窓の外を見ていました。

「どうしたの、アリサちゃん」

つい先日、その金髪美少女、アリサ・バーニングスの友達となつた月村すずかが、心配そうに声をかけます。

アリサは憂鬱そうな表情を隠すことなく、将来は大和撫子な美人になるわね、この子……と思いながら、

「ちゅうとね……」

そう言つて、手をひらひらさせました。

「話せないことなの？」

「別に……ただ、ちょっと搜してるヤツが見つからないのよ」

それだけ言つと、重い息をハア～っと吐き出し、話はこれでお終いとばかりに再び外を見ます。

アリサには、前世の記憶がありました。  
ちなみにアリサ・ローウェルな前世ではありません！  
あんなトンデモ悲しい平行世界な前世ではないのです。

かなり、近いけど……

それはともかく、アリサは前世で一人の青年とお付き合いをしていました。

特に際立つた才能がある男ではありません。  
イケメンだった訳でもありません。

それでも、前世の彼女は彼のことがとても大好きでした。

IQ180オーバーの超絶美人にして、絶対無敵のお嬢様！

群がる男は彼女の背後関係と容姿にメロメロです。

でも、彼は違った。違ったのです！

どう違うかと聞かれれば困りますが、とにかく違いました。

そんな彼のことが、アリサは好きで好きでどうしようもありません。

だからアリサは、奥手でオタクな彼を押せ押せで口説き落とします。彼女はツンデlena強気つ子でしたが、流石に年齢が20オーバーなだけあって、こういう時は積極的でした。

押せ押せアリサに彼は目を白黒させてしばし呆然としたあと、ひやつほー、これで年齢＝恋人イナイ歴から卒業だぜ！ なんて言いました。

アリサは頬を引き攣らせましたが、まあ、これからは教育しだいよね？ なんて思いながら、につこり笑います。

彼は何かと言うと、脱 童貞なんて叫ぶおバカさんではあつたけど、言つてることと裏腹に、ガツガツ身体を求めようとはしません。

今迄彼女の周りに居た男たちとは矢張り違います。

ああ、やつぱりコイツにしてよかつた。

アリサは幸せでした。あの日までは……

ある日、彼は子供を庇つてトラックに跳ねられ死んでしまうのです。

……アリサは泣きました。

いつぱいいつぱい泣きました。

泣いて、泣いて、泣いて……そうして彼の最期の言葉を思い出します。

お前の、そういうアトコが大嫌いなんだ。だから、もう別れようぜ。  
そして、さつさと俺のことなんか忘れちまえ。

カツコつけ過ぎなのよ、バカっ！

私は絶対にアンタのことを忘れたりなんかしないからっ！  
……でも、そうね。キチンと、アンタ以外の誰かと、幸せになつて  
みせるわ。

だから、だから今だけ……は、泣い、ても……いいよ、ね……

最後にもう一度だけワンワン大泣きしたあと、彼女は立ち直ります。  
だけど、世界は彼女にとって、とても厳しかったのです……  
資産家の親を持つ彼女は、ある日、親の商売関係のトラブルに巻き  
込まれ、誘拐されて、そのまま……

アリサは、首を絞められ意識が遠のく中、最期に思いました。

ああ、死んだ、私……

こんなんだつたら、アイツにさつさと初めてをあげればよかつたな。

なのに、私ったら……

……会いたい。

アイツに、会い、たい……

会つて、今度こそアンタと……

しあわせになるんだ

次に気がついたとき、彼女は赤ん坊になつていきました。  
アリサは長い長い赤ん坊生活のなか、思つたのです。  
これはきっと、神様がくれたチャンス。

もう一度、アイツと出会い、今度こそ幸せになるための……

それでも思わなければ、赤ちゃんなんてやってられなかつた、なん

「……」とは秘密です。

「…………サちゃん、アリサちゃん！」

「ふえつー？」

物思いにふけてたアリサは、突然に身体をがくがく揺さぶられました。

アリサを揺さぶっていたのは、すずかと同時期に友達になつた高町なのは。

ツインテールをぴょーぴょーさせる、笑顔が物凄く可愛い女の子です。

前世では友人まるで居なかつたアリサは、すずかと、なのはがとても大切です。

「ねえつー！　ちゃんと聞いてつー！」

「なによ、わづ……」

「あのねあのね、昨日「ひにこねつ、あつちやー」ねさんのがきたの

つ

なのはは手をぱたぱたさせて、その子猫がいかに可愛らしか説明します。

すずかは猫派なので、なのはが仲間になつたことが嬉しいみたい。

でも、アリサは犬派です。

猫も好きですが、どうも彼がぬこぬこ言つてたのを思い出して、ちよつとイラッとする。

なんせアノばか。可愛い恋人ほつといて、猫ばっかり可愛がるヤツでしたから。

まあ、逆恨みつてやつですね。

でも、それはなのはの家にきた子猫には関係のないこと。  
アリサは首をぶんぶん振つて気を取り直すと、

「んじゅわ、今日なのはんちであそぼつか?」

今日は一度良いことに、塾とお稽古事はありません。  
すずかはあるみたいでしたが、夜からなので嬉しそうに頷きます。

そして、なのはも……

「うんっー。」

元気の好い返事です。

そして、再びどれだけ子猫が可愛らしかを語り始めました。

楽しそうに聞くすずかと、ちょっと呆れ気味のアリサ。

そんなアリサは、なほの話を聞いてるつむぎ、ふと思いつめます。

生まれ変わるなら、ぬごがいい

あのバカの言葉です。

まさか、ね……

でも、もじそりだったり、びひつよへ。

32

アリサとおのの博会まで、あともう少し……

……でも、お互にこぼづくんでしようか?

「でねでね、お名前は、ぬごやんって叫びのつー。」

ぶーつー… と思い切り吹き出したアリサは、わっと耳へこぼづくかもしけませんね。

「あ、アリサちゃん！？」

「どうしたの？ 大丈夫？」

「あ、はは、は……だ、大丈夫よ、大丈夫。そんな訳ないんだから  
つ」

「なにがなの？」

「なんでもないわよ！なんでもつ！」

主人公がただのぬこだつて、みんなキッチンと理解してるよな？

人間にメタモルフォーゼで、アリサとちゅつちゅつなんてないんだ  
からなつ！

大体、ヒロ……って誰だよおまヒイきんぱつのあくあ wセダルフ t  
gふじこ

この作品自体の年齢的な設定。（原作とは関係なしにて、この設定）

ぬ」 1セコ

「じゅじん 高校2年生（とらぎ的な意味で一年留年）

月村 忍 高校2年生

高町美由希 中学3年生

高町なのは 小学1年生

その他は、なのはの年齢に合わせて考えつつー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0029y/>

---

とわのこぬこ

2011年10月31日15時13分発行